

隠蔽種群における生物多様性の変動機構

(研究期間：平成 13 年～ 17 年)

任期付研究員：山崎 裕治 (富山大学)

総 評 (研究を継続するべき：優れた成果が期待できる)

本研究は、隠蔽種群 (主にスナヤツメ種群：北方種と南方種) について遺伝・形態・生態的特性を解析し、分類学的整理を目指すとともに、生殖的隔離・共存機構及び遺伝的変異性の検討を行い、そこで得られた情報と生息地における環境要因との相互関係を理解し、多様性の変動機構を解明するものである。

日本国内の大掛かりなフィールド調査を通じて、2種の遺伝的隔離要因が生殖時期のずれによる生殖隔離であることを明らかにするなど、順調に研究が進捗しているものと評価できる。

科学的・技術的な価値は概ね高いと評価できるが、遺伝マーカーを用いた解析で遺伝子多様性の変動要因がどこまで解明可能か等、理論的に云われているどの部分が検証できたのか成果をはっきりさせることも必要である。今後の波及効果については、スナヤツメの課題から、どのように進化、環境の一般論へと展開できるかによるが、現時点でも概ね期待できるものと評価できる。

情報発信については、専門性の高い論文誌へ発表するなど、概ね行われていると評価できるが、より国際的にレベルの高いジャーナルに挑戦するなど、今後の幅広い発信が期待される。また、短期間に日本全国でフィールドワークを行い、遺伝解析を詳細に行い計画通りの成果を上げており、研究計画は適切であると評価できるが、2種が簡便に識別できることから、今後も種多様性及び2種の分布実態を詳細に把握するという観点からモニタリング調査も継続するべきである。

一方、所属機関においては、大講座制が採用されており、若手研究者が主体的に研究が行える環境が整備され、十分自立して研究が行われているものと評価できる。また、優れた研究人材の確保に向けて、所属機関においては積極的に任期制が活用されており、互いに刺激し合い発展的な研究活動が展開されていると判断でき、任期制の定着への効果は十分であると評価できる。さらに、迅速かつ適切な事務処理など、任期付研究員の円滑な研究活動の実施に向けて、所属機関の支援は十分に行われているものと評価できる。

以上により、本研究は順調に進捗しているものの、所期の目標達成に向けては、スナヤツメからの進化、環境への発展が鍵となることを指摘したい。今後の発展を期待しつつ、現時点では優れた成果が期待できる研究であると評価できる。 < 総合評価： b >

今後は、新たな手法の開発を通して、一般性のある課題へと展開させることを念頭に置きつつ、周辺領域との連携も図り、また、特定の機能遺伝子群の多型を詳細に調査するなどの戦術も必要と考えられる。このような点に留意しつつ、今後とも研究を継続するべきである。 < 今後の進め方： a >

評価結果

総合 評価	今後の 進め方	目標 達成度	研究成果				研究 計画	研究者 の自立性	任期制の定 着への効果	所属機関 の支援
			科学的・技術的価値	科学的・技術的波及効果	社会的・経済的波及効果	情報発信				
b	a	a	b	b	b	b	a	a	a	a

